

## 復元された竹唐臼

歴史民俗資料館の玄関に竹で編んだ高さ80cmあまりの農機具が展示されています。この農機具は竹唐臼(とうす)といって、粃と玄米を分離する粃摺りに使われていたものです。

唐臼は江戸時代の初期、1624年に中国から長崎を経て日本に伝わりました。日本で改良が進み、江戸時代後期になると唐臼は広く使われるようになりました。唐臼には竹唐臼と桶唐臼があり、昭和初年で竹唐臼が五円、桶唐臼が七円でした。三月下旬、唐臼屋は弟子とともに車力に道具と材料を積んで出発し、十月の秋祭りに帰ってきます。その間、注文主の家に三食付きで泊まり込んで唐臼を製作しました。田植えと盆に村に帰る数日と、月に一・二度部品を取りに戻るときを除き、半年にわたる旅でした。ただ、昭和初期の不況に際して、一日に一臼作って五円の売上があがるので、農業に比べるととてもよい日当でした。しかし、昭和に入ると動力粃摺機が普及し、1955年頃までに姿を消してしまいます。

矢野では、能下・中野・上・瓜生・金坂などの地区ごとに唐臼屋があり、能下と金坂では1930年代まで生産が続けられました。金坂では1932年に廃業した尾西勝治氏、能下では山田菊之助氏が最後の唐臼職人です。

山田菊之助氏も1940年代には唐臼作りをやめました。1988年、90才のとき約50年ぶりに昔のままの手法で竹唐臼を復元しました。この竹唐臼が「後世の資料に役立てば」と歴史民俗資料館に寄贈されて今も玄関に展示されています。

山田菊之助氏は16才のとき、唐臼職人となるため龍野市揖西の親方に弟子入りし、五年年期の予定のところを三年で技術を習得しました。1915年(大正4)から30年近くにわたり新宮町・三日月町を中心に年間百四・五十台を手がけました。相生市史編纂にあたり竹唐臼の生産について書いた地主喬武庫川女子大学教授と話し合っているうちに「元気なうちに一つ自分の作ったもの後世に残してみよう」と思い立ち竹唐臼を復元しました。

参考資料 1988年2月16日 神戸新聞「50年ぶり竹唐臼復元」  
相生市史四巻 生業と生活 3唐臼屋



# 歴史民俗資料館の展示をリニューアル



常設展 矢野荘の歴史



郷土の偉人 佐多稲子コーナー

歴史民俗資料館の展示のリニューアルが完成し、古代から現代まで相生市の歩みを一覧できるようになりました。二階は、古代から江戸時代までの矢野荘の歴史を展示しています。三濃山求福教寺・大避神社・那波八幡宮・相生天満宮などがどの時代にもどのような経緯で作られたのか、など私たちの身近にあるものの歴史的背景を説明しています。一階は、明治から昭和まで、唐端清太郎の創立した播磨船渠創立から始まって「造船所とともに歩んだ相生」の移り変わりを展示しています。また、二階に「郷土の偉人」として福田眉仙、水守亀之助、佐多稲子、浦山貢・桐郎を紹介しています。

## 歴史民俗資料館のホームページ

歴史民俗資料館の展示リニューアルにあわせて、ホームページを作りました。

<http://www2.aioi-city-lib.com/bunkazai/siryoukan/index.html>

ヤフーの検索では「相生市立歴史民俗資料館－相生市立図書館」というところをクリックしますと歴史民俗資料館のホームページが開きます。



## ふるさと相生つれづれ草を発行

資料館だよりが毎月一回作られていた頃、平成5年7月から15年4月まで、棚橋純子さんが体験や相生の伝承を連載されてきました。本書は好評を博していた棚橋さんの文章をまとめたもので、鰯江十二景をはじめ、「嫌われた秀吉」「魚市場の法螺貝」など166の文章と各頁一枚の写真を収録しています。

A4版215頁 1800円 80冊限定 資料館で販売しています。